未定（仮

檜高　黎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
未定（仮

【Ｎコード】
Ｎ０４３０Ｙ

【作者名】
檜高　黎

【あらすじ】
青年は、現実の世界に違和感を感じていた。
唯一誇れるのは、剣の才においては他者を寄せ付けない程の実力があったと言う事のみ。
無事、居合剣術を優勝し、帰路に帰る途中で不慮の事故に逢う。
気が付けば見覚えのない場所に倒れていた、そこにやって来た人物に捕らえられ、行き成り牢獄行きに。

落雷と共に・・・

青年は古都京都に居た、居合の大会に出るために、3日間の競技を終え、大会は彼の優勝で幕を閉じた。競技後の取材を適当にすませ、会場をでる、外は紅葉が真赤に染め上がっていた。そんな季節の感動さえ、彼の瞳にはセピア色に染まっていた。
彼は、他者より秀でた部分はない、ある一つの分野においてのみ天武の才を持っていた。
剣の才においては、他者よりも圧倒的なまでに抜きに出ていた。そんな彼には数ある悩みの中で、常に付きまとう悩みがあった。
彼は、いつも違和感を感じていた、今現実にある風景がまるで虚像であるが如く、空ろな世界。
どんなに優れた才をもって居たとしても、彼にとって現実味がない、まるでガランドウの世界。
「天才か・・・世間はそう騒ぐが俺にとっては大した事じゃないんだよな」
此処ではない何処かに、いつも行きたいと彼は思っていた。
会場を出てから、ホテルまでの帰路を静かに歩みだす、時計の時刻は6時過ぎを指し示していた。
薄暗くなった空、ビルと言う森に囲まれた雑踏の中を彼はひたすら歩く。
雑踏の中、突然、雷鳴と共に雨が降り出した、人々は足早に歩き出す。
彼だけは、そんな事気にも止めずのんびりとしたものだった。
「次の信号を渡ればホテルに着くな。夕飯には間に合いそうだな、食いっぱぐれるのは御免だ」
彼の頭の中には、夕飯の事しか頭になかったのである、雨に濡れようが余程の事がない限り死ぬことはないと思っていたからだ、唯、彼でさえ想像もしない出来事が目の前に立ちふさがるとはこの時思

っても見なかったのだ。
信号が変わり横断歩道を渡りだす・・・一歩また一歩と歩みを進める。
交差点の中央部分にさしかかった辺りだった、突然彼の頭上に今まで感じたことない衝撃が走った。
「――――――ヅガァンンンン」
雑踏を行きかう周囲の人々は驚きを隠せない。
「おい！人が落雷に撃たれたぞ！俺は介護に回るから、誰か救急車を呼んでくれ！」
男性がおもむろに落雷が落ちた場所に歩みを進める、アスファルトが焼け焦げた匂いと煙でよく見えない、手で口にハンカチを当て、落雷の落下した場所へ何とかたどり着く。
「！！！！！」
「誰も居ない・・・確かに人が落雷に撃たれたのを見たのに！」
辺りは騒然とし、救急車も到着した様だ、警察により事情聴取も行われた、目撃証言によれば複数の人が確かに人に落雷が落ちたのを視認していた。

剣戟

「ん・・・」
彼は周りを見渡す、鬱蒼とした深緑に包まれた森の中に彼は仰向けで倒れていた。
「まだ頭がクラクラする、何処だ此処は・・・？」
一生懸命記憶を手繰り寄せる、居合大会からの帰り道ーーーーーー
「そうだ、確か今まで感じたことのない衝撃が体に走ったのは憶えてる」
恐らく雷に打たれたのだろうか？あの時、雷鳴が鳴ってたからな、ゆっくりと指先を曲げる、指は動くみたいだ、次に体を動かし起き上がる、何とか立てるようだった。
「まだ痺れてるか、とは言う物の落雷に打たれてよく生きてるな俺・・・」
深緑の隙間から木漏れ日が漏れている、鳥の泣き声が耳に届く。
「しかし空気が美味いなぁ・・・完全に都会の空気じゃないなこれは」
こんな何処かもわからない状態に遭っても彼はのんびりとしていた、次の瞬間、複数の馬の足音が聞こえてきた。
ーーーーーーーードドッドドッドドッドドドーーーーーー
次の瞬間、複数の兵士達に囲まれる、その中でも小隊の指揮官らしき人物が話し掛けてきた。
「貴殿は何者か？何処から来た？見慣れない服装だが、身分を明かしてもらおうか？」
「場合によっては捕縛する事になるが、正直に身分を明かしたほうが身のためだぞ？」
一瞬にしてその場が凍りつく、そんな状況でも彼は相変わらずだった。
「何処から来たと言われてもなぁ、空からかな？」

「貴殿は、我らを愚弄するつもりか？空だと！では貴殿は天の使いとでも言うのか？」
彼は一瞬考えた後、言葉を発した、愚かな一言を。
「そうかもねぇ・・・・」
その場にいた指揮官以外の兵士は酷く激高した、剣を抜きこちらに敵意をあらわにしている。
「冗談通じないんだね・・・」
「では貴殿が本当に、天の使いだと言うならばこの精鋭を見事退けて証明してみろ！」
「５人か、結構な数だな、だが此処で死ぬわけにはいかないんでね」
囲まれたと同時に、次の瞬間、兵士の一人が斬りかかって来た、俺は素早く抜刀し甲冑の合間を縫って喉元に切先を突き立てた、後方から槍を持った兵士が突きを繰り出して来たのを瞬時に見抜き、鞘で軌道を受け流す。
「どう？これでもやるかい？場合によっては殺す事になるけどそれでもいいかな？」
「貴殿は何者だ？そんな戦い方なぞ今まで見たこともない、我等の精鋭をいとも簡単にあしらうとはな、見事な腕だな、お前達は下がってなさい、私が直に相手をする」
「その腕、殺すには惜しいが、湖の騎士このランスロットが貰い受ける！」
「名前だけは格好いいじゃないか、やれる物ならやってみろ！」
空気が張り詰める・・・お互い間合いを取って動かない、どれ程時間が経っただろうか？
木の枝から此方を不思議そうに見ていた、鳥が飛び立ったその一瞬、ランスロットが喉元目掛けて突いてきた、瞬時に刀で受け流す。
「なんて早い突きだ・・・受け流すのが精一杯だった・・・」
一方ランスロットはと言うと、甲冑の兜で表情が読み取れない。
「本気で突いたつもりなんだがな・・・まさか防がれるとはあな

がち天の使いってのは虚言ではないか」
お互い距離を保って間合いを取る、不用意に間合いに入ればどちらか、或いは双方死ぬと予感していた。
「仕方ない、これしかないか」
俺は刀を鞘に納める。
「どうした？臆したか？」
「嫌、アンタの技は相当な物だよ、正直今から出す技を持っても勝てるかどうかわからないくらいだからな」
「剣を鞘に収めた状態で繰り出す剣戟等聞いたこともないが？」
「ああ、これじゃないとアンタには勝てそうにないんでね、まぁ奥の手って奴かな」
お互い円を描き螺旋状に間合いを縮める、お互いの間合いが重なった瞬間。
ランスロットの渾身の一撃が、俺の頭上に向かって振り落とされる、と、同時に俺は素早く抜刀し体の位置を右斜めに入れ替え、ランスロットの上段からの剣戟をを紙一重で左に交わし、袈裟切りからランスロットの兜をかすめてた。
「まさかこれまで避けられるとはね、見た事もない剣技を捌かれるとは正直、化け物だな」
「それはこっちの台詞だ、当たりはせずとも兜を持ってかれるとは・・・」
「俺もさっきの一撃で左腕にかすり傷負わされるとは思ってなかったよ、紙一重で交わしたつもりなんだけど」
「お互いこれ以上は本当に殺し合いになる、このランスロット騎士の誇りに賭けて誓う、悪いようにはしないから捕縛されてくれないか？」
二人の間に静寂が流れる、兵士達は目の前の出来事に呆然としている様だった。
「行くあてもないしアンタがそこまで言うなら捕縛されてもいいかな、死ぬのは嫌だしね」

「城に着いたら取調べがあるが、身の安全は必ず保障する」
俺はすぐさま手足を拘束され馬に乗せられ、城に連れて行かれる事になった。
「これからどうなんだろうか」
そんな一抹の不安を覚えながら浅い眠りに入って行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0430y/

未定（仮

2011年10月30日06時19分発行